人権だより No.278(2021.3)

レッテルを貼らない生き方を

生徒相談室 上谷 香織

「レッテルを貼る」という言葉があります。「人や物について、一方的に評価する」という意味で、通常は良い意味では使いません。英語では「label ラベル」と言います。品物に貼る「ラベル」を思い浮かべると、なるほど、そういう語源かと納得のいく言葉です。

例えば、ファイルにラベルを貼っておけば、たくさんあるプリントを簡単に分類することができます。また、スーパーの野菜売り場で、よく似た葉物野菜に名前の書いたラベルが貼ってあると、間違えずに買うことができます。こんなふうに、「ラベル」の役割は、そのものの中味が何なのかを明確に示すということです。

けれども、この「ラベル」を人に貼ってしまうと、やっかいです。「あの人はこういう人だ」「あの学校の生徒はこうだ」などはよく聞く言葉ですが、その「ラベル」が、その人やその学校の生徒の中味を明確に示しているかというと、そういうわけではありません。ある一面を表しているに過ぎないのですが、よく分からないものを少ない情報の中で整理して評価をしようとすると、一方的な見方になってしまいます。これが「レッテルを貼る」ということです。レッテルを貼った側は、分からなかったものを分類できたためにすっきりしますが、それ以降は、その「ラベル」で人やものを捉えるようになります。何か大きな出来事があって、意識的に見直しをしない限り、一度貼ってしまったレッテルは、なかなかはがすことができません。

私の普段の生活を振り返ってみると、無意識のうちに「あの生徒は～」「あのクラスは～」とレッテルを貼ってしまっていることがあって、ハッとすることがあります。では、どうすれば正しく見ることができるのか、それは、相手をよく知ろうと努力することでしか解決できないのではないかと思います。話して、関わり、自分の相手に対する情報を更新していくことが必要です。このやっかいな「レッテル」ですが、他人だけではなく、自分自身に貼っていることもあります。「私はこんな人だから」と決めつけて、思考を停止させていませんか。自分に貼ってしまった「ラベル」を、一度すべてはずしてみるのもいいかもしれません。

【人権委員の声】

私も人間にその「ラベル」を貼ってしまうことがありました。自分が知っている情報はその人の一部に過ぎないものだと理解し、その「ラベル」を外せなくなる前に、そのラベルを見直したいと思います。また、自分はこんな人だからと思考をやめてしまわないように、自分の「ラベル」も一回はがしていろいろなことにチャレンジをしてみたいです。

1年3組　山下真綾

私は一度、「ラベル」を全てはがしてみることで、相手や自分の良さやすばらしさを再発見することができるのではないかと思いました。私もいろいろなレッテルをはがし、様々な見方で考えられるようになりたいと思います。

1年4組　清水美海

誰かに貼ったレッテル、貼られたレッテルは意識しないと変えられないことを知った。相手の普段の様子だけでレッテルを貼り、自分の中で勝手な解釈をしないようにしたいと思った。また、自分自身も変わっていくので、いつまでも同じようなレッテルを自分に貼らないようにしようと思った。

2年3組　清家楓

僕はこの人権だよりを読んで、今までたくさんのものや人にレッテルを貼ってしまっていたことに気づくことができました。これからはそれらのレッテルをはずし、また一からそれぞれの人への情報、イメージを更新し、相手をよく知ろうと思います。

2年4組　山本哲平

多分私も気付かないうちに「この人はこういう人だ」と決めつけているところがあると思いました。その人の一部を見てその人を知った気にならずに、もっと相手について知っていこうと思いました。

3年3組　甲斐茜

僕も他人に「レッテルを貼る」ということを無意識にしてしまっています。特に南校では付き合いの長い人が多いので、レッテルを貼ってしまっている人は少なくないと思います。そのため、これを機に相手をよく知る努力をしたいです。

5年3組　髙橋駿

【字を識る】Jai Bhim!（ジャイビーム!）

1億人以上ともいわれるインド仏教徒を率いる僧侶、佐々井秀麗。

1935年岡山県生まれ、1967年に32歳で渡印してから50年以上、身分差別や貧困と闘い、インド発祥でありながら廃れていた仏教を復興させることに身を捧げている人物。その豪快でお茶目な素顔に迫る密着ドキュメンタリー映画を観てきました。

今時、こんなに人間くさいお坊さんがいただろうか。眼光鋭く説法し、次の瞬間にはお茶目に笑い出す。なぜか孫の手を使って祈り、日本のご飯を食べたいと駄々をこねながらも、生きていくために嫌いなインド料理を食べる。インド人は金を借りても返しに来ないと嘆きながらも、お金を盗まれて困っていると相談にきた家族に金を貸す（与える）。自分が何かをなさないことを、決して人のせいにはしない。

「世界が燃えているんだよ。じっとしていられるか!!」

そうした佐々井秀麗さんの生きざまが、「ぼく（監督）」の手持ちカメラで臨場感たっぷりに映し出された作品でした。

映画のタイトル「Jai Bhim」の意味は、次回のお楽しみに。